

沖縄地域総合交通史研究*

—基礎的事項及びイメージについて—

A HISTORICAL STUDY ON THE TRANSPORTATION OF OKINAWA ISLANDS

- Some fundamentals and a general picture -

上 間 清**.

by Kiyoshi Uyema

The Okinawa Islands, located in the East China Sea and a southern-most prefecture of Japan, had its own kingdom which lasted for more than four hundreds years until its unification to Japan in 1879. With its 'historical isolation' and storage of unique historical-cultural assets, the islands so far has caught many historians' research interests. In this paper the author, having been engaged in the historical study of Okinawan local civil engineering evidences, is to discuss some fundamentals and a general picture of the comprehensive transportation history of Okinawa Islands. The fundamentals include the purpose of study, a proposal of periods-classification from view point of transportation history, "time differences" in introducing of transportation means between Japan as a whole and the Islands. This study is an introductory one of a comprehensive study which is to last for some more years.

1. まえがき

本研究は沖縄地方における地域土木史研究の一環として、交通に関する総合的研究の基礎的事項の考察とその概観の把握を試みるものである。

「総合」とする理由は、従来個別的研究の域をいなかった交通分野の研究を、対外比較研究をも加えて集成総合して陸海空の各交通分野を地域の通史と連動させつつ体系的な叙述を試みようとする意図にある。今回は、総合交通史として考察する際の基礎的な事項、すなわち、研究史、交通史時代区分、交通における歴史「格差」、年表等、そのほか交通史全体のイメージの把握について考察するものである。

2. 「交通」研究の経緯

一応「交通研究」に位置づけられる研究として従来強い関心が寄せられたのは、いわゆる文化史的時代区分として「外国向性貿易時代」と称される、中国及び南方諸国との交易を中心とした下記の時代に関するものである。

- ① 13世紀から19世紀まで継続した琉球・中国間の航路による政治的・経済的交流に関する研究
- ② 15世紀から16世紀中葉に至る海路による南方諸国との主として経済的交流に関する研究
- ③ その他、19世紀中葉に数多く来島した外国船との政治的交渉に関するもの等

これらは、たしかに「交通史」としても意義あるものではあるが、どちらかといへば政治あるいは経済史としての色彩が濃いものであり、交通史の視点から再考し、体系化する必要があると考え

* 沖縄地域、交通史、時代区分、交通「格差」
**正会員 工博 琉球大教授 工学土木工学科
(〒903-1 西原町字千原 1)

られる。すなわち、交通機関、交通技術、交通政策、またこれの対外比較等の観点からの考察と体系化である。

そのほか、古代から地域内交通の手段として活躍した山原船（やんばるしん）に関する考察、大正時代以降の鉄軌道交通（鉄道、電車）に関する研究等、個別的研究が蓄積されている。このように個々の成果はあるものの、交通史として体系的に叙述された研究の成果は極めて不十分な状況にあり、その対応が求められているところである。

表－１には、筆者調査による近代以前の「交通史」に関する主な文献を掲示した。

３．時代区分と「格差」

沖縄の歴史区分ありかたについては、これまで史学者の間に論争があり種々の歴史区分が提案されてきている。すなわち「仲原説」、「新里説」、「高良説」等である。わが国における歴史区分としては、原始－古代－中世－近世－近代－現代の区分が定着しているが、沖縄については、いわゆる対本土歴史格差が６～１０世紀あるとされ、わが国の一般歴史区分との対応関係が明確でなく、かつ「中世」（封建制社会前記－鎌倉・室町）が欠落するとする史観も根強いものがある。交通史の観点からどのように時代の区分をすべきか、重

表－１ 昭和初期以前交通史関連主要文献

	主 要 文 献	関連期	備 考
1	上杉県令沖縄本島巡回日記（1881年（明14）年）：上杉茂憲著 沖縄県史（1975年刊/県教育委員会）第11巻所収	明治初期	当時の陸路、海路の状況。
2	沖縄一千年史：真境名安興 著，1923年（大正12）日本大学刊	古代	王国時代の海外との交通。
3	海東路日記：申叔舟王令 編，1471年	古代	朝鮮側から見た琉球の事情、交流状況。
4	喜安日記：喜安入道善元 著，1627年頃	近世	近世初期、琉球王の江戸上がり状況、琉球大和間の海路、陸路の状況。
5	琉球：伊差川佑実 編，1743～	古代・近世	王府による各王代の諸記録。
6	冊封使使録集（全12巻）：嘉手納宗徳 編，1967～	古代～近世	中国冊封使者の見た琉球事情。
7	大英国軍艦アクト号航海記及び海難記：1817年	近世	欧州人の見た琉球事情、当時の極東航路。
8	中山伝信録（全6巻）：徐葆光，1721年刊	近世	18世紀初頭の中国琉球航路、国内交通事情
9	中世南島通交貿易史の研究：小葉田淳，1939年，京大出版	古代・近世	日琉間交通、琉明・南島交通。
10	沖縄海洋発展史：安里延 著，沖縄海外協会刊，1942年刊	古代・近世	王国時代の対中国、朝鮮、本土、南方交通
11	交通：大田良博，「沖縄県史5第4章」所収，1975年	近世・近代	道路交通、鉄道、汽船の状況。
12	大航海時代の琉球：赤嶺誠記 著，沖縄県史社，1988年	古代	歴代宝案にみる海外交通詳査。
13	近代沖縄の鉄道と海運：金城功，ひるぎ社，1983年	近代	鉄道、電車、軌道馬車、船舶状況。
14	おもろさうし：外間守善/西郷信綱 著，岩波書店，1981年（第7刷）	原始古代	地名、舟運状況等から交通状況推論。
15	沖縄歴史地図－歴史編－：宮城栄昌/高宮広衛 編，1983年，柏書房刊	原始古代 近世	各類の地名分布、外国航路、江戸上がりルート他。
16	沖縄歴史の道調査報告書Ⅳ：沖縄県教育委員会，1987年	古代・近世	古い時代の道路網状況。

- ①太平洋郵船会社(米国) 1867
- ②人力車出現 1868

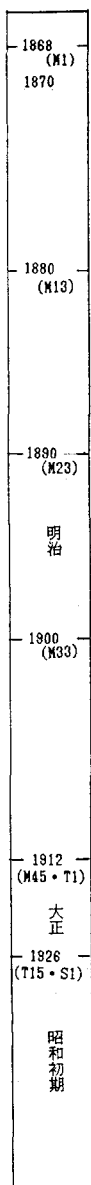
- ①' 郵船蒸気船会社 1871
- ③新橋・横浜間鉄道開通 1872

- ③' 私鉄「日本鉄道」1881
- ④馬車鉄道(東京) 1882

- ③" 京都 路面電車 1895

- ⑤電気・ガソリン自動車移入 1900

- ⑥日本航空輸送 設立、輸送開始 1928



《沖縄地域》

- 馬車交通出現 1884
- ①大阪商船沖繩航路開設 1884
- ②人力車移入 1888

- 自転車移入 1900

- ③電車(沖繩電気軌道)開業 1914
- ③' 沖繩県営鉄道開業 1914
- ④馬車軌道(沖繩馬車軌道) 1914
- ⑤Tフォード車移入 乗合自動車開業 1917

- ⑥日台連絡旅客飛行機(日本航空)那覇中継開始 1936

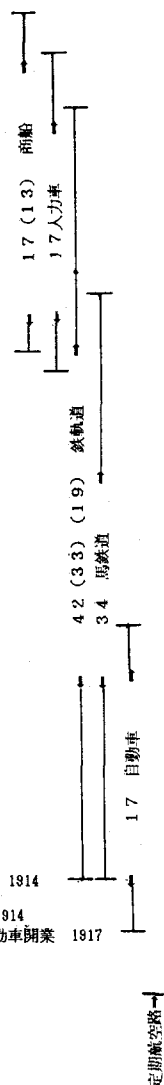


図-1 交通機関導入「較差」

要な課題である。外国移入、交通技術・制度、普及等を考慮した交通の発達過程を十分に検討する必要があると考えられるが、当面、交通機関の導入・定着の側面に注目し、かつ、時代区分の各説を参考、また、わかりやすさを考慮して次のような区分を提示したい。

- ① 原始交通時代 おもろ時代・グスク時代、

原始～14世紀中葉(縄文-平安)

- ② 古琉球交通時代 王国形成発展期、14世紀中葉～1609年(中世・鎌倉-室町)
- ③ 近世交通時代 島津藩監視下の王国時代、1609年～1879年(江戸時代-明治初期)
- ④ 近代交通時代 明治・大正・昭和初期、1879～1945(前記・後期に区分可)

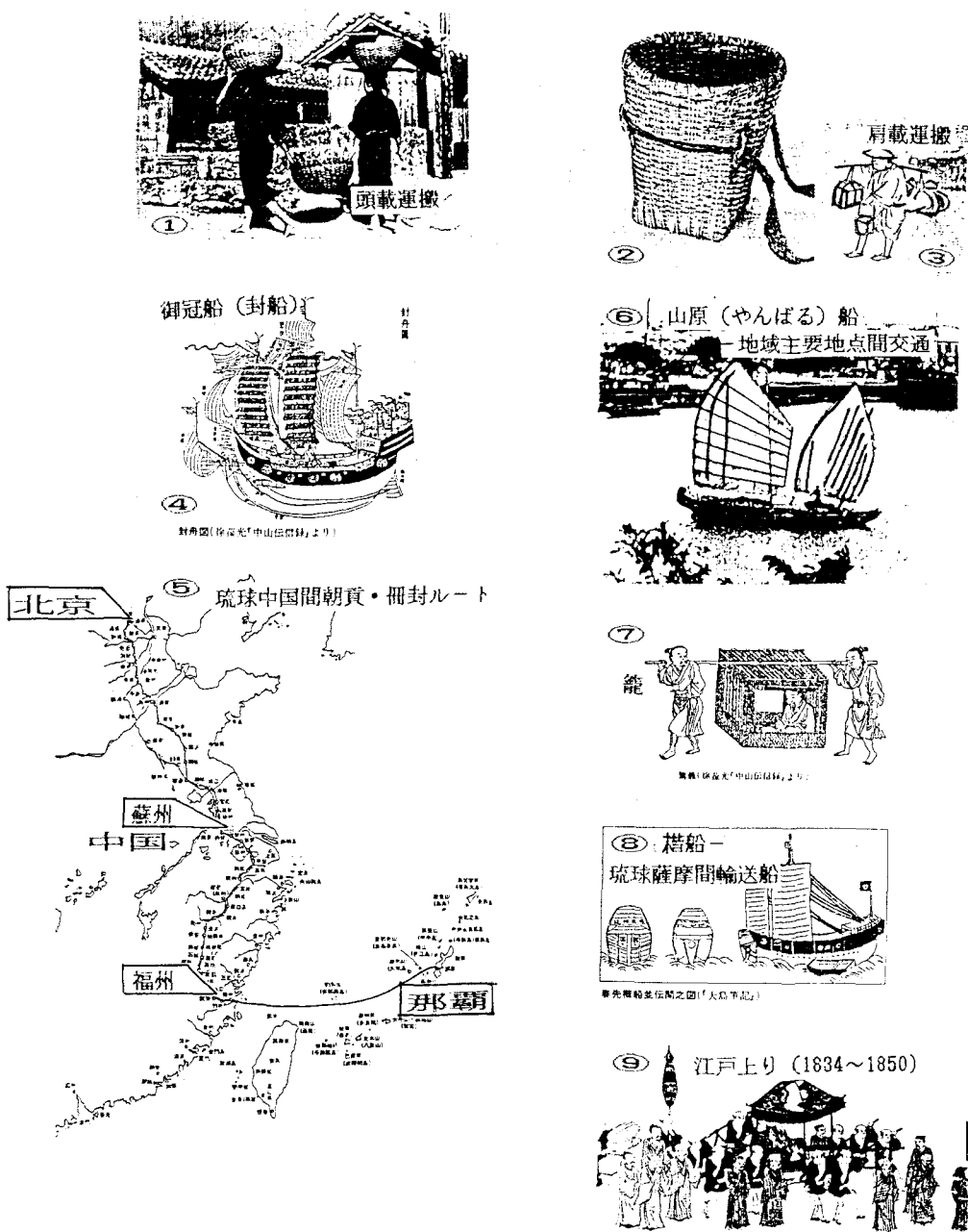
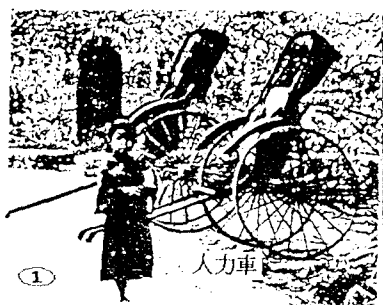


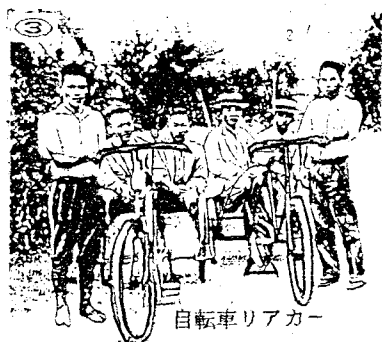
図-2 交通機関発達経緯—明治前



②



首里丸 - 大阪商船 (株)



昭和10年頃、大宮村の大宮丸に就いて、馬車と並んで乗客から、馬車村の馬車村、馬車村の馬車村、大宮村の馬車村、馬車村の馬車村の馬車村の馬車村。

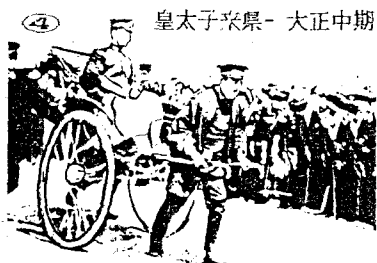


図-3 交通機関発達経緯 - 明治・大正

⑤ 現代交通時代 米軍統治時代、施政権返還～現在

さて、沖縄の歴史考察においては、前述のように、いわゆる時代の「格差」をどう評価するかということが問題とされることがあり、史学上の課題でもある。表-2は、交通機関の導入・地域普及について、わが国一般との「時間格差」を試みに比較提示したものである。技術、制度等についても同様の比較検討が必要であり、考察をすすめているところである。

4. 交通史イメージ

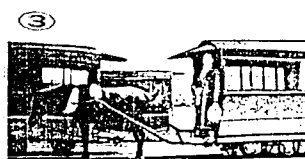
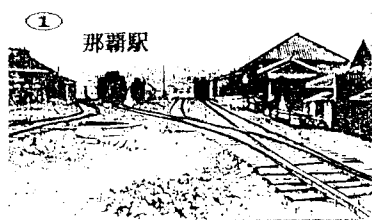
図-1(a)、(b)、(c)は沖縄地方における交通機関の導入発達の状況を、昭和初期の段階まで概観したものである。詳細を期すためには、これらにくわえて、サバニ(地舟)やバス、また庶民の頭載搬具としてのカメ類や竹製の民具類、

そのた背負の搬具など種々提示の必要があるがここでは省き、概観するにとどめたが、この図により、沖縄交通史における交通機関の進展過程のイメージを得ることができよう。

前節で提示した時代区分により、各時代の交通状況を略述すれば次のような性格づけができると考える。

①原始交通時代 陸上は専ら徒歩による交通、グスク時代には割拠した支配層であった「按司」たちは籠など用いた。「おもろ」の叙述等から、この時代の後期あたりには地舟による沿岸交通はかなり進展していた。道路(徒歩)は本島においては西海岸を中心に集落内及び集落間に通じており、一部は敷石舗装がなされていた(仲泊遺跡)。

②古琉球交通時代 1372年「中山王」の明代の中国との交流開始、琉球の国際船舶交通定着



軌道馬車 1916~1945

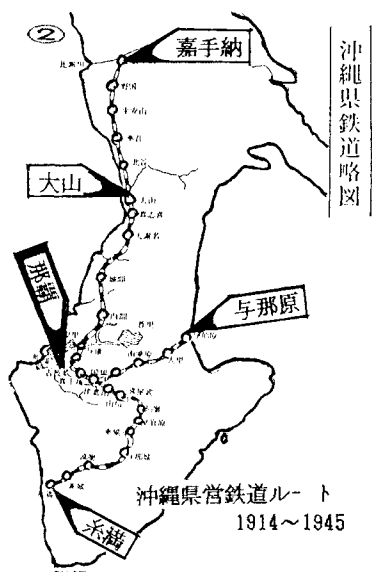


図-4 交通機関発達経緯-大正・昭和初期

化。15世紀初頭～16世紀中葉、東南アジア諸国との交流発展。明中国琉球へ「海舟」を与える（1385）。地域間の長距離交通は沿岸舟運が主体。農耕馬、農耕牛各地に増え、交通手段への活用も盛んとなるが基本的に陸上は徒歩時代。琉球王しばしば周辺諸島を攻略討伐、舟運技術、船の建造技術一定の水準にあったと考えられる。王国統一後、本島南部及び西沿岸部の道路網進展。石積技術発達、橋梁・道路建造・築城に応用盛ん。

③近代交通時代 東南アジア諸国との交流はとだえたが（1570）中国とは政治的交流・交易継続。「桕船」による島津（鹿児島）との交通頻繁。本島南部に「ウマーイ」巡拝道など定着。橋梁の石造化活発、道路網拡大。集落内歩行道路敷石舗装化進む。「宿道（しゅくみち）」ルート本島北部（国頭方）・中部（中頭方）・南部（島尻方）地方に定着、そのほか「船手座」「普請座」など行政機関もあり交通行政上の整備みられる。後期に至って「江戸上り」を通して、海路・陸路の長距離交通の経験。しかし全般的な海・陸の交通手段には基本的な進展はみられない。

④近代交通時代 廃藩置県（1871）後の明治期の諸「革命」の影響を受け、進展した時代。交通にとっても「革命の時代」と称するにふさわしい。1884～1917 の34年間に、馬車交通、近代船舶による本土定期航路、人力車、電車・鉄道の開業、馬車軌道、乗合自動車などが出現し、消長を経て定着した。1936年には定期航空路の開設もみている。質量面はさておき、現代にみる交通機関はこの時代にはぼ出揃ったといへよう。しかし、那覇を中心とする「都市」地域とそのたの地域との格差は大きく、地方では、依然として、古来の交通状況下に置かれていたところが多い。

⑤現代交通時代 戦争による地域社会・経済の壊滅によるゼロへの回帰と、復興発展、一層の近代化の促進の時代。米軍統治下の自動車への過度の馴化による陸上交通の単一交通手段依存社会の形成。施政権返還後の計画交通行政の本格的導入と、陸・海・空 各分野の施設の「格差是正」策による顕著な進展。軌道交通導入への本格的取組みの継続。主要離島間旅客交通の顕著な航空交通依存。主要島と周辺離島間の架橋の進展。都市交通問題の広域的な顕現と多様な解決ニーズの出現。地域開発の「個性化」と新たな交通課題への対応の緊急性。

5. おわりに

わが国の一地方とはいへ「沖縄」研究への学界の関心は高く、今日依然として自然学、文化学の各分野で多くの取組みがなされている。歴史関連課題についても多くの学徒が研究に当たっているが、土木工学の視点からの研究は十分な成果がなく、建築学の分野に対する遅れもあり、対応が急がれているところである。地方の土木歴史とはいってもその関連分野も広い。筆者は過去石造遺構の研究に従事してきているが、今回新に地域の「総合交通史」の叙述を目標に研究を開始したものである。今回は、その全体像の概念的把握を目的として若干の考察を行った。今後の考察によっては、提示した内容の再考も当然に必要と考えられる。今後、提示した時代区分にしたがって、考察を進展させたいと考えている。なお、本研究及び今後の研究については文部省科学研究費による助成があったことを付記しておきたい。

参考文献

- (1) 表-1 掲示した諸文献
- (2) 上間清；沖縄の石造遺構に関する土木史的研究、1987
- (3) 谷藤正三；交通工学総論、技報堂、1969
他